

おしまい

月夜

ある三角

夕日

うさぎ

ゆうびんの話

町の話

久野那美

水平線は海のかたち。そして空のかたち。
私の輪郭は「私」のかたち。そして「私以外の全部」のかたち。
同じ輪郭線で描けるものはいつもふたつある。
何も共有しない、全く違うふたつのものだけが、
いつもおなじ形をしている。

おしまい

……おしまいがやってきた。

前触れはなかった。誰も、知らせてくれなかったし。
ぐうんと曲がった町並みは、
窓の外で、変わらず静かに閉じていた。
風もなく。音もなく。
光だけが表面で揺れていた。

オレンジで、
緑で、
水色で、
金色で、
ピンク色の
……町。

それが世界の全部だった。
いちばん最初から、世界はそうやってそこにあった。
だからそれが世界だった。
そこにいつもあるはずだった。
ずっとずっと、あるはずだった。
なのにおしまい……？

おしまいになるにあたって。
わからないことはいろいろあった。
おしまいでなければ何かわかってたのかというと、
そうでもないような気もするけど。

たとえば窓は？
たとえば町は？
たとえば、光は？
すっかりおしまいになる、
というのは難しいことのような気がした。

ほんとうは何か、おしまいにならないものもあって、
おしまいになるのも、
実はそんなにたいしたことじゃないのかもしれない、
とも思ってみた。
あんまり説得力がなかった。
嘘なのかもしれないし、と思ってもみた。
あんまり説得力がなかった。
おしまい、というのは、もっと、
厳密で正確なもののような気がした。

とてもとても静かだった。辺りは何も動かなかった。
じっとしているのに、何も動かないのに、
すこしずつ、すこしずつ、世界は揺れはじめた。

わからないのも。おしまい。
つまらないのも、おしまい。
ほんとのこと、おしまい。

静かなのも、おしまい。
揺れるのも。町の輪郭も。
オレンジが消えた。

緑が消えた。

水色が消えた。

金色が、ピンク色が消えた。

街が消えた。

窓が消えた。

何もかもがすっかり消えた。

……おしまいがやってきた。

ビニールのストローの先からぐんにやりと世界が生まれた。

風の中でたっぷり生きて、おしまいになった。
それだけしか知らない。
誰も、知らない。
そういうことも、ある。

月夜

ひさしぶりに外へ出ると、
しんと冷えた夜の空気はいつの間にか消えていて。
なま暖かい風がのったりと吹いていた。
夜桜が白く闇に浮かんでいた。
聞き覚えのある低い音が、遠くから聞こえてきた。
のぼり切った坂の向こうに月が見えた。

(ごろん、ごろん、ごろん、ごろん…)

道の向こうから、一心に坂道を転がって来る月が見えた。

(ごろん、ごろん、ごろん、ごろん…)

どこも傷んでいない、どこもへこんでいない。
かんべきなまんまるだった。

小さい物語

(ごろん、ごろん、ごろん、ごろん…)

同じ速さで、同じリズムで、たんたんど、月は転がって来た。
輪郭はほんとうに大きくて、曲面は鈍く銀色に光っていた。
月が道をふさいでいるので、向こう側は何も見えなかった。

(ごろん、ごろん、ごろん、ごろん…)

……そうだった。
こんな月の夜がときどきあった。

ひとつきに一回。月はこんなかたちになる。
だけど、なかなかこんな風に会えない。

(ごろん、ごろん、ごろん、…ごろん。)

月は転がるのをやめて、私の目の前で止まった。
路沿いにならんだ桜の木が、
月明かりに照らされてぼんやりと光っていた。

「こんばんは。満月だったんですね。今夜。」

月は黙って止まっていた。

「桜が開きましたね。」

月は黙って止まっていた。

「あなたがいると、夜の桜がきれいに見えます。」

月は黙って止まっていた。

「びっくりしました。今夜誰かに会うなんて思わなかったから。」

「あなたはいつも、そんな夜にやってくる。」

「覚えてますか？私のこと。………私は、覚えてます。
いつもは忘れてるけど、会ったときだけ思い出します。」

「夜中の校庭をごろんごろん横切っていくあなたを、
屋上から見見ていた夜。」

「踏切の向こうに、あなたを見つけて立ち止まった夜。」

「帰るところがなかった夜。」

「見上げると真っ暗な闇があつて。
まんまるなあなたはそうやって一心に転がっていました。」

「あなたの周りはぼんやりと明るくて。だけど輪郭はくっきりとかんぺきにまるかった。」

「偶然だったんでしょけど。あの夜も、あの夜も、あの夜も。偶然でもまんまるだった。あの夜も。あの夜も。」

「こんばんは。って私は言ったけど。あなたは何も答えてくれなかった。」

「あの夜も。あの夜も。大きな音を立てて、私の目の前を通り過ぎていきました。」

「忙しそうに。無愛想に。」

「あなたに会ったっていうことは…。私は空を見てたんでしょうか。空は真っ暗だったんでしょうか。」

私は、それ以上話しかけるのをあきらめた。
…気がついたのだ。そこはすれ違うには狭すぎる道だった。
壁に張り付くようにして、月のために道を空けた。

(ごろん、ごろん、ごろん、ごろん…)

月は転がっていった。先は下り坂だ。
だけど同じ速さで、だけど同じリズムで、
月は同じように転がっていった。
大きな音を立て、一心に転がっていった。

(ごろん、ごろん、ごろん、ごろん…)

音は少しずつ小さくなっていった。
あたりはまた、少しずつ暗くなった。

銀色のまんまるがだんだんにだんだんに小さくなって、

闇の向こうへ消えていくのを。…見えなくなるまで見ていた。
音だけはいつまでも耳に残って離れなかった。
あの夜がそうだったように。
あの夜がそうだったように。

月のいなくなった道を、ゆっくりゆっくり歩いた。
桜はまだほんのりと白かった。
ごろん、ごろん、ごろん、ごろん、
帰ってぐっすり眠ろう。あの音を聞きながら…。

………こんな月夜がときどきある。

ある三角

あるところに、三角がいました。

三角は、自分が三角だ、ということについて、いろいろと考えていました。

それはとても不思議なことのような気もしましたし、ものすごく間違ったことのような気もしましたし、ちょっとだけ違うことのような気もしましたし、そんなものだろうという気もしました。

三角に生まれてしまったばかりに他にすることもないので、毎日毎日、そのことを考えていました。

ある日、三角は散歩にでかけました。

真っ直ぐな一本道をずんずんずんずん、歩いていきました。

広い原っぱの真ん中で、道が十字に交わっていました。進む手掛かりはそれだけでした。
交差点に、小さな花が咲いていました。

事情はよくわからないのですが、その花は燃えているところでした。

小さな花なので、小さな炎をあげていました。

どんどん燃えて、もう残っているのは最後のはっぱだけなのでした。

(花が燃えている音)

三角は立ち止まりました。そして、燃えている最後のはっぱに声をかけてみました。

「ぼくは三角で、こうして君のところを通り過ぎていくんだけれど、僕は結局……」

その花は、とても立派な花でした。燃えながら、炎の下から、何か、答えてくれようとしたのです。でも。遅すぎました。ほのおが、早すぎたのかも知れません。

花が口を開きかけたとき、その瞬間、最後のはっぱが燃え尽きてしまいました。

あっという間に。花はそこから消えてしまったのです。後にはひとひらの灰が残っているだけでした。

(花が燃え尽きる音)

「あ。」

燃えてしまったのだから仕方ありません。

燃えてしまった花に手を合わせ、三角は再び歩きはじめました。

まっすぐまっすぐ歩いていくと……

(転がる者が近づいてくる音)

：転がるものが転がってきました

転がるものが転がって行ってしまわないうちに、三角は声をかけてみました。

「ぼくは三角で、こうして君のところを通り過ぎていくんだけれど、僕は結局……」

その時。

(強い風の音)

西から強い風が吹いてきました。

それはそれは強い風でした。三角はびっくりして身を伏せました。2辺をしっかりと踏みしめて。頂点を低くして。
(転がるものが飛ばされていく音)

「あ。」

転がるものは、あつという間に飛ばされていってしまいました、転がるものが地平線の向こうへ消えていくのを、三角は黙って見送りました。行ってしまったものは仕方ありません。三角は再び歩き始めました。今度はとぼとぼと歩きました。なんとなく、つまらなくなってきました。どのくらい歩いたでしょう。やがて三角は立ち止まりました。そして、一番大きな角で地面を軽く叩いてみました。ノックしたのです。

(地面をノックする音)

「ぼくは三角で、こうして君のところを通り過ぎていくんだけど、僕は結局……」
ノックされたので、地面は、返事をしようと思いました。

(地響き)

ただっ広い地面には見る間に大きな亀裂が走り、地球は2つに割れてしまいました。

「あ。」

2つの大きな半球が、ぽっかり口をあけていました。三角は、地球の口を覗きこみました。中身がぎっしりとつまっていました。

「はあ。」

三角は、大きなため息をつきました。割れてしまったものは仕方ありません。三角は再び歩き始めました。けれども、地面がなくなってしまうので、歩くのは無理なようでした。真っ暗な宇宙の中を、泳いで進むことにしました。先には何も見えませんでした。随分先まで、誰にも会えないかもしれないかと思いました。三角は進みました。進んだくらいでは誰にも会えないような気がしました。だったらなにをすればいいのか。考える時間だけは。たくさん、あるような気がしていました。

夕日

少年が、夕日を見ていた。夕日は赤いので、少年の目も同じように赤かった。夕日は遠いので、少年の目も同じように遠かった。橙色の雲がすこしずつ溶け始め。おおきなまんまるがくっきりと宙に浮いた。夕日はどこまでもまんまるだった。

少年は悲しくなった。少年は夕日を見ていた。どこにも無駄のない完璧なまんまるだった。

夕日は少年を見ていなかった。夕日は何も見ていなかった。少年は少年だけど、夕日は夕日だった。少年は悲しくなった。

とても悲しかった。
どうして悲しいと思ったのか、よくわからなかった。

泣くこともできず、立ち去ることもできず、
少年は夕日を見ていた。

どうにも悲しくて仕方がないので、少年は夕日に尋ねてみた。
「どうして君は夕日で、どうしてぼくは少年なんだろう？」

夕日は簡潔に答えた。

「あなたが夕日じゃなくて、私が少年じゃないからよ。」

少年は唸った。

完璧な答だと思った。

無駄のない答だと思った。

さすが、夕日だけのことはある、と思った。

思うほど悲しくなった。

とても悲しくなった。

どうしてこんなに悲しいと思ったのか、よくわからなかった。

それでも。

少年は夕日を見ていた。

抗議することも出来ず、立ち去ることもできず、

少年は夕日を見ていた。

少年が夕日を見ていた。

夕日はやっぱり少年を見ていなかった。

見れば見るほど、どんどん、どうしようもなく悲しかった。

少年が、悲しかった。

どんどんと悲しみは大きさを増し。

どうしようもなく大きくなってしまった。

突然、ふと、少年は気付いた。

こんなにも悲しいのなら、自分は死んでしまわなくてはいけない。

魅力的な思いつきのような気がした。

いろんなことが、それで解決するような気がした。

完璧なまんまるはこのままではあまりに悲しく、
他にはもう方法がないような気がした。

死んでしまわなくては。

少年は思った。

少年は、しっかりと、そう思った。

目を閉じて考えている少年の外で。

空はもう碧かった。

夕日は既に。

なにもかも連れてどこかへ消えてしまっていた。

うさぎ

その頃、うさぎは走っていた。

長い耳をぴんと立てて、

あとあしで地面を蹴って、

風の中を走った。

雪の上を走った。

ぬかるみの中を走った。

どこまでもどこまでも走った。

へ行かなくちゃ。もっともっと遠くまで。もっともっと、もっともっと遠くまで。へ

雨をよけて走った。

川に沿って走った。

地平線を超えて走った。

水平線に向かって走った。

地球を何まわりもして。小さな足跡をたくさん残して。

空気は冷たく、地面は固かった。
鼻先をかすめていくやわらかい風だけを頼りに、彼は走った。
たくさんのたくさんのものたちが、彼の横を通り過ぎていった。
泥だらけの足の裏には血がにじみ、地面を点々と染めた。
彼は走り続けた。
そのうち。
わからなくなってきた。
道を求めて走っているのか、自分自身が道なのか。
そして、それはきつとどっちでもいいことだった。おなじことだった。
1本の道は、世界を貫いてどこまでも果てしなく続いていて、そしてそれは彼自身だった。

いったい・・・僕はどこまで来たんだろう。この道は、どこまで続いているんだろう。

考えてもわからなかった。

そこは、いつも、長く険しい「道の途中」だった。

後ろ足で地面を蹴って、風の中を走り続けた・・・。

その頃うさぎは月を見ていた。

地面にあいた、大きな深い穴の中で。

暗くて冷たい土の中で。

下から見上げる穴は高くそびえ立っていた。

越えることのできない、高くて湿った壁があった。

壁の上に空があった。

空の向こうに月が見えた。

まんまるな月。

だんだんにへこんでいくいびつな形の月。

弓の形をした薄くて鋭い月。

見えない月。

昼間の空にうかぶ、白い影ぼうしのような月。

見えるものは穴の壁と空だけだった。

だから彼女は月を見ていた。
いつもいつも月を見ていた。
穴があくほど。毎日毎日月を見ていた。
見ることは向かうことだった。

行かなくちゃ。もっともっとと遠くまで。もっともっとと、もっともっとと遠くまで。

毎日月に向かううち、

わからなくなってきた。

ここは穴の中なのか、空の向こうの月なのか。

そして、それはきつとどっちでもいいことだった。おなじことだった。

世界はまんまるな穴の外にどこまでも広がっていて、先には銀色に光る月があった。
そしてそれは彼女自身だった。

あたしは、どこから来たんだろう。いつからここにいるんだろう？

考えてもわからなかった。

土の壁に囲まれた暗い穴の中では世界のすべてが空と月だった。
目に入る砂を払って、まるい銀の月を見上げた・・。

ずっと昔。彼らは「あの場所」を出て「遠く」へ向かった。

ひとりぼっちで遠くへ向かった。

逃げなければいけなかった。

そこではないどこかへ。

そこではないどこかへ。

もっともっとと遠くへ。

世界を目指して、彼らは逃げた。

彼らは逃げ続け、そしていつしか世界になった。

なので世界を背負ったまま、彼らは逃げ続けた。

どこまでも。どこからも。

それから長い時間が過ぎて。ずうっと先のある寒い日に。ふたつの世界がすれ違った。どこからでも見える場所。穴の中のうさぎと道の途中のうさぎは、吹雪の中ですれ違った。彼らははじめて立ち止まり、世界の向こうへ目を凝らした。世界の向こう側に、雪の中に揺れる長い耳がかすかに見えた。ような気がした。自分の長い耳もやっぱり、風の中でぶるんぶるんと揺れていた。彼らは同時に「あれ？」と思った。そして。けっこう遠くまで来たのかもしれないな。と思った。

ゆうびんの話

白山羊さんはある日。手紙を食べずに封を開いた。そんなことは初めてだった。どうしてそんなことをしようと思ったのか、ぜんぜんわからなかった。

はじめて開いた手紙は干し草の香りがした。「さっきの手紙のごようじなあに。」几帳面な小さな文字がならんでいた。

あの日。白山羊さんは黒山羊さんに手紙を書きたかった。どうしてもどうしても手紙を書きたかった。だけど何を書けばいいのかわからなくて、考えている内に、なぜだか「さようなら」の手紙を書いてしまった。どうしてもなのかわからなかった。

だけども、どうしても。
どうしても黒山羊さんに手紙を届けたかったので
「さようなら」の手紙を出してしまった。

次の日。

黒山羊さんから返事が来た。

「さようなら」に返事が来た。

白山羊さんは困ってしまった。

どうしていいのかわからなくて。

途方に暮れているうちに、食べてしまった。

仕方がないので返事を書いた。

「さっきの手紙のごようじなあに。」

あれから気の遠くなるような時間が過ぎ。

気の遠くなるような数の手紙がふたりの間を行き来した。

はじめて開いた手紙は干し草の香りがした。

「さっきの手紙のごようじなあに。」

几帳面な小さな文字がならんでいた。

白山羊さんはちゃんと覚えていた。

さっきの手紙のごようじ：「さようなら」

の手紙を書いた。

黒山羊さんは今日。手紙を食べずに封を開いた。

そんなことは初めてだった。

どうしてそんなことをしようと思ったのか、

ぜんぜんわからなかった。

はじめて開けた手紙は干し草の香りがした。

「さようなら。」

几帳面な小さな文字がならんでいた。

町の話

遠く離れた二つの町がありました。

うっかりすれば遠くにあることさえ忘れてしまうほど、

二つの町は遠いのです。

あんまりに遠いものですから、道は途中で足りなくなって途絶えていました。

互いの町を行き来する手段は何もありませんでした。

いつの頃からだったでしょうか。

互いの町がちゃんと遠くにあることを忘れないでいるために、

二つの町は夜になると小さく灯かりを点すようになりました。

夜になるとどちらの町も新しい灯かりを点し、遠くの灯かりを眺めるのです。

どちらの町も、何があっても灯かりを絶やさないように注意していました。

灯かりを点しておく、「寂しく」なくなるような気がしたのですが、

それが自分の町のためなのか、遠くの町のためなのか、よく分かりませんでした。

長い時間が過ぎました。

ふたつの町はとても大きく、明るくなりました。

もう、町には闇がなくなりました。

お互いの灯かりは町の中まで届かなくなりました。

いつしか二つの町は遠くの町のことを思い出さなくなりました。

自分の町を十分に自分の灯かりで照らせるようになったのです。

町は幸せでした。遠くの町も幸せでした。

長い時間が過ぎました……

あるとき。困ったことが起きました。

一つの町が壊れてしまったのです。

町は闇の中に沈み込んでしまいました。

壊れた町は狼狽えました。

こんなに深い闇の中で、一体どっちを向いて何を見ればいいのか分かりませんでした。

誰かが、ふと遠くを見ました。

遠くに灯かりが見えました。大きな灯かりでした。

壊れた町は不思議な気持ちで灯かりを見上げました。

いったい何の灯かりなのかはわかりませんでした。誰も、覚えていませんでした。

遠くに町があることを。もう誰も覚えていませんでした。

分からなくても灯かりが見えました。覚えていなくても灯かりが見えました。大きな灯かりでした。なんだかわからないけれど、それはとても懐かしくて、親しい灯かりのような気がしました。

遠くの町は遠くにあるものですから、何も知りませんでした。遠くに町があることも、遠くの町が壊れてしまったことも、向こうの町が自分の町の灯かりを見上げていることも、ちっとも知りませんでした。

壊れていない町はいつものように暮らしていました。毎日夜になると新しい灯かりを点して自分の町を包んでいました。

もう、寂しいとは思いませんでした。

小さい物語

二〇一四年十二月十二日初版第一刷行

著者 久野那美

発行者 久野那美

nami.sparrow@gmail.com